

「対人援助通訳の実践から」

第2回

飯田奈美子

1. はじめに

前回は、私の自己紹介と私がなぜコミュニティ通訳研究をはじめようになっただかについて述べていきました。今回は、もう少しコミュニティ通訳についての説明を皆さんにしていきたいと思っております。そして、対人援助通訳としての通訳者の役割について考えさせられたエピソードをご紹介しますと思います。まずは、コミュニティ通訳の歴史を通訳システムについて医療通訳の例をあげてご紹介します。

2. コミュニティ通訳の歴史と通訳システム

日本における対人援助場面のコミュニティ通訳の歴史と通訳システムについて、音声言語通訳の医療通訳を例に挙げて説明していきます。医療通訳は、コミュニティ通訳の中でも通訳資格化の活動が活発に行われ、研究が比較的進んでおり、それにより対人援助のコミュニティ通訳に共通する課題が明らかにされています。

日本の医療通訳の始まりは、在住外国人に対する通訳として発展してきました。1990年の出入国管理及び難民認定法の改正以降、日本で生活する外国人が急増し、

在住外国人が直面する医療問題が表面化しました。当初は通訳の必要性ではなく、在住外国人の健康保険の未加入や経済的困窮、医療費の未支払いなどの医療受診の問題と捉えられていました。その問題を外国人支援団体等が支援していく中で、次第に医療場面における言語の問題が注目されるようになり、外国人支援団体等は医療通訳サービスを提供し始めるようになりました。そのため、現在の在住外国人に対する医療通訳システムの多くは、多くが外国人支援の一環として始められたものであり、通訳者はボランティアとして位置づけられるようになったのです。外国人支援としての医療通訳の開始は、外国語もしくは日本語のできる支援者たちが支援を行いながら通訳を行うというものでした。しかし、外国人集住地区から多くの通訳ニーズが出てくると、外国人集住地区にボランティア通訳者を派遣する活動が始まりました。活動を通じて、単に通訳ができればよいという認識から、医療の専門知識や用語を正確に訳せる語学能力や通訳技術、通訳倫理の習得も必要だと変化していき、研修の実施が求められるようになりました。

そして、医療通訳は有償のボランティア活動と位置付けられ、報酬が出るようになった。しかし、多くは1回3時間で交通費込3000円程度であり、交通費や昼食代などを考えると割が合わないものであります。

現在の在住外国人に対する医療通訳システムは、多くが外国人支援の一環として作られ、支援者たちが草の根活動で築きあげていったものであり、その活動の意義を理解した自治体や病院などで継続して行われるようになっていったのでした。

次に、医療通訳システムについて紹介していきます。

医療通訳の労働形態として、ボランティア型と雇成型があります。ボランティア型は、NPO 団体や自治体などに登録して無償もしくは有償（少額）で医療通訳を行うものです。雇成型は病院スタッフとして雇用され、職業として医療通訳を行うものです。東海地方の日系南米人の集住地区では雇成型で医療通訳を配置している病院がある。病院によって常勤や非常勤と様々な形態で雇用されていますが、外国語が出来る職員が医療事務や看護師として雇用され、必要に応じて医療通訳を行う兼任型もあります。

通訳形態としては、派遣式、駐在式、遠隔（電話）式の3種類の仕組みが構築されています。自治体やNPO 団体によるボランティア型の医療通訳は派遣式が多いです。例えば、神奈川県や京都市の医療通訳システムでは、協定を締結した病院に医療通訳を派遣しています。このシステムでは、誤訳などが起こった際に医師が加入す

る損害保険を適用できるようにしたり、医療通訳の担当者を病院内に配置して通訳利用ルールの院内の認識を徹底することができます。しかし、協定病院に限定されているので、外国人が行きたい病院に医療通訳を派遣することができないなどの制約があります。派遣式では、病院からの依頼だけでなく、外国人からの依頼にも対応する団体もある。外国人が通訳依頼を行い、自分が行きたい病院に通訳者が同行するというものです。この形式の長所は、外国人が行きたい病院を選べることです。しかし、初診の病院では、医療通訳を介するコミュニケーションに不慣れで通訳者の役割を理解せずに、通訳者を家族や友人と同様の存在として、様々なことを通訳者に押し付けられる場合があり、通訳者がソーシャルワーカーの役割をせざるを得ないこともあります。

駐在式は、病院に通訳者が駐在して通訳を行うものである。病院が独自に通訳者を登録して通訳サービスを提供したり、NPO 団体が病院と提携して通訳者を常駐させている場合もあります。病院駐在式のメリットは、病院内に通訳がいることで、通訳者も病院の機能や医療専門職の役割を知ることができ、他の医療者と連携が取りやすいという点があります。また、医療者に通訳の存在を知ってもらい、通訳の利用方法や通訳を介してコミュニケーションを行う際の注意点も喚起しやすい利点もあります。しかし、医療機関の理解を得ることが難しく、集住地区など外国人の利用が多い地域のみ限定されてしまいます。

遠隔式は、電話やタブレットを利用して通訳を行う仕組みです。通訳者が現地

行かないことで、遠隔地や感染症の受診にも対応できるのですが、その反面、インフォームドコンセントや複雑な内容、深刻な状況の通訳には適しません。遠隔式は、訪日外国人の増加から通訳会社が参入をして通訳サービスを開始していています。

以上のように、在住外国人支援から始まった医療通訳は、労働形態がボランティア型と雇成型に分かれているだけでなく、通訳形態も派遣や駐在、電話など様々な形態が混在しています。それぞれの通訳形態は、各地域の状況、集住する外国人の国籍、人数、地域の特色などに対応して形成され、各地域によって通訳形態は異なっています。

医療通訳を例に挙げましたが、他の領域（福祉や教育）においても比較的同じような経緯や通訳システムで成り立っています。

3. 通訳者の役割「傾聴」

上記のように、通訳者は、所属している団体によって、さまざまな通訳形態で通訳を行っています。基本的に通訳をしている人はボランティアが多く、通訳者一人が病院などの派遣先に派遣されて通訳を行います。最初の数回はトレーニングとして先輩通訳者やコーディネーターが付き添ってくれるところもありますが、ほとんどの場合、そのようなトレーニングなしで本番を迎えます。そこで通訳者を悩ますのは、どのように訳出の問題ではなく（それもありませんが）、待ち時間で聞かされるクライアントの話にどのように対応したらいいかということも問題になってくるのです。

たとえば、NPO 団体に所属している通

訳者が派遣型で病院に派遣されて通訳を行う場合、先ほど述べたように、基本的に1人で派遣されます。病院の入り口や受付などで患者や患者家族と待ち合わせをして、受付から診察、検査、会計、薬局など患者の受診行動の最初から最後まで付き添います。大病院になるほど、待ち時間が長くなり、半日以上かかることも珍しくありません。その間、通訳者は患者や患者の家族とさまざまな話をします。病気のこと、家族のこと、仕事のこと、日本での生活のこと、母国の家族や生活のことなどなどです。母語で話をするので、患者や家族の方は喜んで話をされます。中には、深刻な内容の話もあります。深刻な内容の話聞くことにより、通訳者が助けたいと思い、通訳者一人で支援を行ってしまうなど、通訳者の役割を超えてしまう場合があります。このようなことがあるため、海外の医療通訳では、待合の時は一緒に待たないとしているところもあります。でも、私は、通訳者が通訳セッション以外の時間にクライアントの話をきくということはとても大事だと思っています。私はある経験をして、対人援助通訳者の役割として「傾聴」が必要とされているのだと知りました。

私は、支援相談員の仕事をしていた時、通訳セッションが終わったあとに、よく中国帰国者の方と二人で話をしていました。たわいもない世間話の中に、家族のこと、日本の生活のこと、中国での生活のことが話されました。ある残留邦人のCさん（女性）は、私によくこのように言いました。

「子供たちは変わってしまった。」Cさんのお子さんたちは近所に住んでいて、週末

はCさんの家にみんなで集まり、Cさんのお世話をしているとても親孝行のお子さんたちでした。Cさんがなぜそのようなことを「通訳者」の私に言うのか、その時は全然わかりませんでした。

そして、最近になってようやくCさんがそのように言った訳がわかったのです。Cさんは、「通訳者である私」に話を聞いてもらいたかったのです。Cさんにとっては、日本での生活のつらさや子供たちに対する心配は、親孝行の子供たちには直接話ができるものではありません。なぜなら、お母さんのそんな気持ちを知ったなら、親孝行の子供たちはとても心配するからです。また、近所にはたくさんの中国帰国者がいますが、家族についての話は、狭いコミュニティの中では、同じ中国語が通じる人がいても多くは話すことができません。そして、漠然とした不安は、援助の専門家に話すほどのものではないと思い、忙しいケースワーカーの邪魔をしないようにしていたのです。

Cさんは、誰かに話をきいてもらい「共感」してもらいたいと思っているだけでした。そして、それは「通訳者としての私」に求めたのです。「通訳者としての私」は、言葉が通じるだけでなく、他の要因もあるのです。それは、家族やコミュニティの人ではなく、自分の問題にかかわるステークホルダーではないこと。そして、守秘義務があり話した内容を外に漏らさない存在だということです。それらを理解し

て、Cさんは私に対して「子供たちは変わってしまった」と発言することで、「通訳者としての私」に話を聞いてほしいという合図を送っていたのだと気付いたのでした。

ことばの通じる通訳者の存在は、異国でくらす外国人などにとっては大きな存在になるといえます。通訳の事例検討会をしていたときに、ある通訳者が病院の待合で待っている間に、患者さんから「死にたい」と書かれたメモを渡され、自分ではどうすることもできず、ただ話をきくだけだったと話をされました。その話を聞いた別の通訳者はこう言いました「かかりつけの医者がいるように、かかりつけの通訳者がいいじゃない。ただ話を聞くことも立派な通訳者の仕事よ」と。

私たち通訳者は、通訳を行うことが主な仕事になります。しかし、対人援助場面においては、通訳者も対人援助者としてさまざまな対応をしていかなければならないことに遭遇し、それを通訳者が個々人で考えながら行っていつています。そのような通訳の現状についての理解は進んでおらず、通訳セッションだけの費用しか支払われなかったり、通訳者の役割ではないと認めてもらえなかったりすることがあります。対人援助チームの一員として通訳者を認めてもらうためには、まずは通訳者がおこなっているさまざまな役割を知ってもらうことが必要だと感じています。